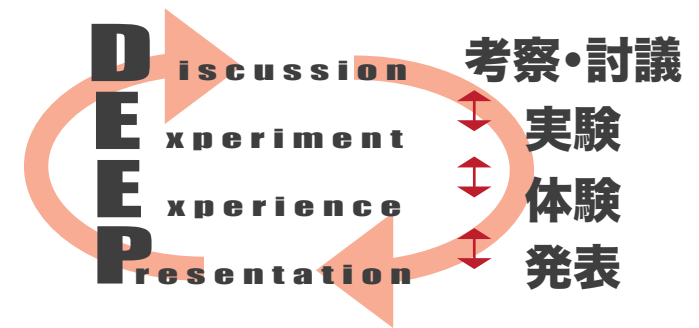


※学校案内パンフレットより中萬学院作成

探究力を育てることを目的にしたDEEP学習



附属中学校では、授業時間数の増加や高等学校入学者選抜がないことなどにより生じた時間的な余裕を使って、単に授業の先取りを行うのではなく、内容を深く掘り下げ、生徒の興味・関心を引き出す豊かな授業を進めます。

フロンティアタイム			
フロンティアタイムは、興味・関心あるテーマを決め、主体的に自分自身を開拓するための時間です			
自主研究	読書活動	自分自身を開拓する時間	
自分が興味・関心あるテーマを設定し、その内容について研究します。	自分が興味・関心ある内容に関する読書をすることで、世界を広げます。		
進路探究	相談・面談		
自らの進路を探究する時間として使います。	授業で疑問に思ったことなどの学習面や生活面についての相談・面談を行います。		

サイエンススタディーズ（総合的な学習の時間）

読解力	情報活用力	課題設定力	課題解決力	発表力
中1	中2	中3		
課題設定に向けて視野を広げる	研究の基礎を身に付ける	コミュニケーション能力を高める		
○外部講師による講演や演習等	○個人による研究(1人1テーマ)	○グループによる共同研究(協働作業)		
テーマ決め	研究発表会(ポスター)	研究発表会(パワーポイント)		
博物館見学、フィールドワーク	宮古島研修、東京散策	研修旅行		

高校の学びへ

横浜サイエンスフロンティア高校

YSFH

附属中学校

校長 栗原 峰夫先生

校長代理 植松 聡先生

学校説明会日程

小学生(主に6年生)とその保護者対象
参加にはホームページでの事前申込が必要です

7/28(土) 本校(右の地図)
7/29(日) 本校(右の地図)
①9:45～10:45 ②11:45～12:45 ③13:45～14:45

蒼煌祭(文化祭)日程

予約不要

9/15(土) 10:00～15:30
9/16(日) 9:30～15:00

詳細は横浜サイエンスフロンティア高校附属中学校ホームページをご確認ください

学校へのaccess

JR鶴見線 鶴見小野駅 徒歩3分

横浜市鶴見区小野町6番地

中学・高校の先生たちが連携していると栗原校長は話します。

「先生たちは、附属中とその後の高校での学びのつながりを強く意識して授業を進めています。本校の附属中には、DEEP学習、フロンティアタイム、サイエンススタディーズなど、様々な体験の機会があります。それらにいかに関心を持って授業を刺激して意欲的に取り組ませるか、先生たちの向上心や熱意も1期生の成長には欠かせないものでした。」

心優しき未来のサイエンスエリート

「横浜サイエンスフロンティア」では、附属中・高校ともに、先端科学の知識と知恵を武器に、グローバルな場で協働して課題解決を図れる「サイエンスエリート」の育成をにかけています。その成果

は大学合格実績にもあらわれており、2018年度入試では国立公立大学に現役で104名が合格しました。「本校の高校生たちは『この大学でこんな学びや研究をしたい』と具体的な希望をもっている生徒が多く、それは国立公立大学の志望者や、後期試験までねばり強く挑む生徒の多さにもあらわれています」と栗原校長。大学の先生や企業の活躍されている方々と出会い、研究を通じて先端科学技術の入り口にふれるなかで、高校生たちはより具体的に自身の進路を考えていくようです。

「附属中でも、たとえば昨年は高校の常任スーパードバイザーの和田昭允先生、パラリンピックの選手と車いす開発の企業の方、弁護士の方から講演いただきました。附属中での『深化』を重んじた様々

な体験、高校生との関わりや外部の方との出会い。それはある意味で『これから求められる力の先取り』です。これまでに高校で育んできた思考力・判断力・表現力を、本校の附属中の生徒たちは今まさに中学から培っています。開拓精神にあふれた1期生たちが『一緒にこの学校をつくっていきましょう!』と愛情をもって2期生たちを引っ張りあげる。その姿に大きな期待を寄せるとともに、中学・高校の融合による相乗効果でよりいっそう生徒の成長を支えていこうと、まさに本校一丸で進めています。」

インタビューを終え、1期生・2期生の授業を見学しました。英語、数学、国語、社会：驚いたのはどの授業でも、生徒たちが熱く意見を交し合う姿です。「この図

形はこうなっているから、この問題は…」この文章はこういう考え方で○段落にわけられて…」臆することなく生き生きと自分のノートを見せ合う生徒たち。その様子に栗原校長の言葉が思い出されました。

「今年度の中学・高校のスローガンは『YSFはチャンスのn乗 自分の力でつかみとれ』。この中高一貫校にはたくさんの学びのチャンスがあります。文理に限らず様々なことを楽しみ、興味をもとう。何より仲間と一緒に勉強・研究するんだという意識を忘れないでほしい。それがサイエンスエリートだと生徒たちにも一生懸命伝えていきます。」

生徒たちの姿から頼もしい「サイエンスエリート」が育っていることを確信し、取材を終えました。

合格実績		2018年度実績抜粋		7期生234名()は過年度生で内数			
国立大		計128(24)名		私立大		計552(182)名	
東大2名		東工大14(1)名		早慶上智		計61(13)名	
東京海洋大2名		京大1名		明青立法中東理		計198(59)名	
北海道大5(1)名		筑波大7名				等合格	
信州大2名		東京農工大9(2)名					
東北大6(1)名		横浜国大16(2)名					
横浜市大14(1)名		首都大東京9(4)名		等合格			
				公費制推薦・AO入試			
				東北大2名		東工大2名	
				筑波大4名		横浜国大1名	
				等合格		等合格	

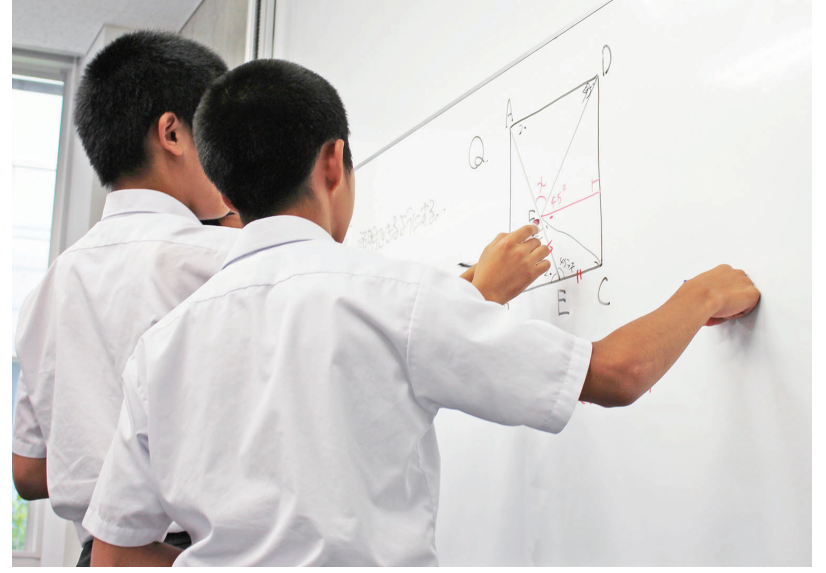


栗原校長が続けます。「各自の研究テーマは宮古島や理数の分野に限らず多岐に渡ります。高校からはサイエンスリテラシー(※)で専門的に『サイエンス』に切り込みますが、附属中ではその下地として視野の広がり、『研究』の意識づくりを大切にしています。そのための大事な題材が宮古

※…科学技術顧問でもある大学の先生や研究者の方々から直接指導を受けられる、高校での課題探究型の授業

島にあったということです。」1期生は人に伝える・伝わるための「言葉の力」「プレゼンテーションの力」も着実につけているそうです。「本校の附属中では、学校説明会や保護者会など生徒がプレゼンテーションをする場面も多々あります。入学時はあまり前に出るタイプでなかった生徒も、他の生徒が人をひきつけて話す姿を見て、『自分もやってみよう』と話の中に少し笑いを織り交ぜてみるなど、自然と工夫をするようになっていきます。」

附属中は1学年80名、授業は主に20名程度ずつに分かれて受けるため、どの生徒にも発言の機会がまわってきます。「お互いによい影響を受けて花開いていく様は、こちらでも感心するほどです」。笑顔の植松校長代理の言葉に、その成長ぶりが伺えます。



「1期生たちの成長について『私の期待を超えています。特に、今年4月の宮古島研修の成果は大きかったですね』と話す栗原校長。附属中学校の特長の一つであるサイエンススタディーズ(総合的な学習の時間)では、中学の3年間を通じて各自で決めた研究テーマに個人・グループで取り組んでおり、宮古島研修はその一環です。

研修に同行した植松校長代理は、「小学校までの『調べ学習』と違い『研究』であるからには、仮説→検証→考察のプロセスが非常に重要です。世界で初めて地下ダムが造られた宮古島で、『先人たちはなぜ、そしてどう挑み成し遂げたのか』を現地の方と伺い自分の目で見ると。現地の中学生やホームステイ先の人々との触れ合いを通じて異文化を体験する。それらの経験を通して『自分たちならどうするだろう』という視点をもてたようです。」

栗原校長が続けます。「各自の研究テーマは宮古島や理数の分野に限らず多岐に渡ります。高校からはサイエンスリテラシー(※)で専門的に『サイエンス』に切り込みますが、附属中ではその下地として視野の広がり、『研究』の意識づくりを大切にしています。そのための大事な題材が宮古

中学と高校の「融合」は着々と

附属中開校による相乗効果は、様々な場面で生まれているようです。「委員会や部活動に加え、たとえば高校生の研究発表に中学生が参加するなど、授業の中でも中学生と高校生が接する機会を設けています。中学生たちはもちろん、高校生たちも『まだ中学生なのにこんなに知識や熱意があるなんて!』と交流の中で互いにより刺激を受けていますね」と力強く話す栗原校長。

生徒同士だけでなく、先生方にも効果があると植松校長代理が続けます。「高校の先生も中学生に授業を行います。中高の先生たちが空き時間に中学生への授業について熱く話し合う。その姿は私も頭が下がるほどのです。」

サイエンスへのあこがれを強く抱いて入学した、様々な個性をもった1期生・2期生たち。「その思いに応えたい」「生徒一人ひとりを大切にしたい」と熱意をもって



相乗効果でさらなる成長を

附属中開校から1年、ますます発展するYSF

2018年
6月6日
取材